

『銀鈴』における増野三良の歌 ——「花藻玉藻」をめぐる

山村 桃子

はじめに

河野翠激により創刊された『銀鈴』は、短歌雑誌『明星』を中心とした新派短歌運動の影響を受け成立した島根の地方文芸誌である⁽¹⁾。

その『銀鈴』において熱心な活躍をみせた歌人の一人、増野三良（一八八九—一九一六）の作品に注目したい。

増野三良（以下三良とする）は島根県浜田市紺屋町生まれの、恒藤（井川）恭の従兄弟である。旧制浜田中学（島根県第二中学校）を卒業し、同郷の文学者である島村抱月を慕い早稲田大学英文科に入学した。卒業後、大阪毎日新聞社に勤めるも退社、放浪する。肺病のため浜田での療養生活中、タゴール詩の翻訳を行い、二七歳にて亡くなった。存命中は『ハガキ文学』『新声』『中学世界』『明星』などに作品を投稿し、『銀鈴』では浜田支部を担当している

（明治三八年一月以降）。その名義は、増野紫星（一・二二号）、増野翅白（三号—一九号）、磯守の三郎など複数あり、短歌作品を発表している。

三良の作風は明星的な浪漫風であり、恒藤恭（以下、恭とする）が彼の追悼文において次のように評している。

屈曲した岬湾、そのあいだにたたえる深藍色の潮のうつくしさを誇りとする浜田の町にうまれた彼は、海が大好きであった。彼の歌や詩の題材には、わだつみの宮をかざる藻の花の奇しいかたちだの、深い水底に篋くわをかかなでる水媛みづわたちのうたのふしぎさだのがくり返しえらばれた。「磯守の三郎」という匿名でよく彼はその作品を雑誌や新聞によせた。有明調の象徴詩や、泣なみだ堇張すみぢの修辞法において彼は巧みな模倣に成功したが、しかもそれらの作品のなかにも彼の独創的な、いいところはその閃きを示していた。また、今は東京で装飾

画家として声明のある杉浦非水氏が、当時浜田の中学校で教師をしていたので、その感化をうけて、彼は絵もかなり熱心に描き、そしてかなりうまくいった⁽²⁾。

(恒藤恭「増野三良をおもふ」)

作品には彼の故郷である浜田の海の情景が多く描かれた。そこに展開されるのは「わたつみの宮をかざる藻の花」や「深い水底に筥篋をかなでる水媛たち」と言われるように空想的なモチーフである。

三良の海を愛する思いは、次の自身の文章にも記されている。

「わが生ひたち」石見 増野三郎

あゝ里川の鮒すくひ、山辺の小鳥狩り、お山の大将をほこりし我は、今や似而非詩人をまねびてあり。おもへば楽しき我が境遇よ、波静かなる鶴島、みどりしたる城山、つねにほゝえみて我を迎ふ。日本海、そばげにわが揺籃なりけり。漁夫がだみ声の歎乃、碧波をわたるあさあけ、夕づく日の波に鷗むるゝたそがれ、さては藻がぐれに白鳥眠る清き月の夜われはたゞその揺籃にねむりて虚栄もあらず、恋もあらず、執着もあらず。まことに綱引く蟹の子、藻刈り乙女を友とする我が境遇のうるはしさよ、あゝ自然を愛し、自然を讃へてうたはんかな。

『ハガキ文学』「ハガキ文学」久保天随選 人

明治三十九年七月

鶴島はかつて浜田の沖合にあった小島、城山は浜田城跡のある松原湾に面した丘陵である。日本海は「わが揺籃」であり、漁夫の舟唄、海人の引き網、藻刈り女などの漁村の風景は、彼にとつて日常的であつた。そうした環境にある自身の表現が「磯守の三良」の名義であつただろう。

本稿では、三良の作品を「花藻玉藻」を中心に取り上げ、『銀鈴』の会員や従兄弟である恭との相互の影響の中で行われた創作活動の在りようをみていきたい。なお、三良の先行研究として岩町功氏⁽³⁾、佐野晴夫氏⁽⁴⁾の一連の論考があり、その人生と生涯にわたる作品について詳しくまとめられているので参照されたい。

一、「花藻玉藻」と「龍媛の賦」

「花藻玉藻」は、三良十六歳を含む四名の歌人による短歌連作(以下、本歌群とする)である。

花藻玉藻 日本海の女王にささげまつる

魂いづこそは遠のきてみなぞこの知らず藻の宮くし媛が胸に 磯守の三郎

夕づつや棹さす波にあくがれて雲のあなたに城見しか 君

追分と裸形をほこる海男を待つ蟹の女が蘆火焚く宵
藻の花の華髪にしたるやさ乙女のよき唄のせて藻刈舟
来る

ゆめなりや花藻玉藻がもつれたる潮に透き見ぬ龍女が
うなぢ

楽湧きぬ真珠抱く女が波の穂の霏に捲かれて舞ふ夕か
な

銀漣に鷗舞ふなり混沌の匂ふを君と丘に居て見る

春潮の海松の林に尾鰭ふりむつがたりする小さき鯛か
な

砂浜や網すく蟹のかたはらに大錨あり小蟹匍ひ出ぬ

森脇桃村

磯の夕玉よする音と歎乃のひびきて胸によき譜かなづ
る

帆のかげと鷗と蒼き海を見て藻汐やく子の幸たたへけ
り

拾ひたる色よき貝に耳あててたのしき海の詩をきくか
も

美しき罔象の姫の夢趁ひて白き藻がくれ白鳥の泣く
玉舟に棹して二人夕ぐれを七彩うつる潮めぐるらむ

松本掬雨

松かげや浜の祠にたたづみて鯛ひく女のうたききたま
へ

薄月は島にかくれて夜の潮に白裳の神の琴の音ぞする
吼へぬべきけはひに似たり大海の真昼現ずる怪形の雲

の
後藤孤星

潮鳴はうみ鱗族の軍勢が今しどよめくかちどきと見る

千鳥なく潮の遠音にひかれ来てそぞろ磯回をめぐる月
の夜

貝やぐら沖の青海にわれ築きて金龍に乗る姫をむかへ
む

『潮浴みて藻の花かざす海姫』と真球とる子があらは
をほこる
〔銀鈴〕十号/明治三十九年一月

森脇桃村、松本掬雨、後藤孤星は、『銀鈴』浜田支部の

会員で(第三節)、次の河野素陽の評によれば、いずれも
旧制浜田中学の同窓という。

花藻玉藻(日本海の女王にさ、げまつる)三良君独特
の筆、梅桜桃李とかざられたるその美しくしさ、眼もあ
やなるばかりに候。桃村君、掬雨君、孤星君共に同窓

の共、謹んで更に感興の深きを覚え候。(同十一号)

「眼もあやなるばかり」と評されたように、浜田の海辺
の情景を幻想的に詠んだ作品である。副題にみられる「日

本海の女王」とは、本作品に多く詠われる女性たち、「藻
の宮くし媛」「藻の花の華鬘にしたるやさ乙女」「龍女」

「金龍に乗る姫」「美しき罔象の姫」「潮浴みて藻の花かざ
す海姫」などの海の女神、また「蟹の女」や「鯛ひく女」

などの海辺で労働する女たちの総称であろうか。海の女神
としては、たとえば日本神話における豊玉姫、水の精霊

「罔象」(ミツハノメ)が挙げられるが、本作品ではそれに
とどまらず、西洋や仏教の女神の姿とも融合的である。

同年七月には、同様の構想に基づいた三良の長詩が載る。

龍媛の賦 増野三郎

金矢射ぬける大海の 波ゆりうごく壮観や 朶おごそかに遠鳴れば、海の巨扉をおしひらき 藻の花かざし龍媛は「天つ日の神来ましぬ」と 手とり舞ふなり波の穂に。 みよあけぼのの巖の巻 うす紫の靄こめて 太古の吹息花やぎぬ

渦雲わきぬ直馳に。 鷗なくなり荒潮に。 たかくさかまく大濤の おごれるさまに狂ひては とどろ振はず八潮路ゆ 破壊の呪なりや鳴りどよみ 海の忿怒を現すとき、ほほとうち笑みたつひめは 飛沫あびつつまぼろしと 浮き来りまた夢と消ゆ

夕湧きいづる瑠璃の雲 異形変化とつどいては 穹門の城きつきたり。「紫金のみ扉に侍らん」と 金龍に乗る奇し媛は、花藻玉藻を華鬢として しづしづまゐる沖つ方。 おん伴ゆりし鷗どり 光みなぎる銀漣に双々翼色映ゆる。

海松の林に尾鰭ふる 鯛やひらめのうまし夢、波にいざよふ藻がくれの 白鳥の脊に白々と 月はてらしぬ。こころ酔ひ 靄にまかれてたつひめは あくがれ出でし幽宮 たゆげの箜篌よ奇し靈韻 海の神祕をほこりがに、星燦として輝けり

(同一四号/明治三十九年七月)

海の女神「龍媛」が、「天つ日の神」を迎えるかのような海の明け方、激しい波濤、黄金の夕暮れ、月夜のわたつ

みの宮と、海の神話的世界が壮麗に、また躍動的に描かれる。

ここで龍媛は「藻の花」をかざして舞い、あるいは「花藻玉藻」を華鬢とする。本歌群の第四句「藻の花の華鬢にしたるやさ乙女」、第五句「花藻玉藻がもつれたる潮に透き見ぬ龍女」と同様の発想に基づき創作されたものといえる。

二、「花藻」「藻の花」の表現

恭が評したように、三良の歌の主要なモチーフとして、「藻の花」「箜篌」「水媛（に類する表現）」がある。うち、「箜篌」「水媛」などは、同時期の象徴詩詩人である薄田泣菫や蒲原有明らの作品にもみられ、その影響が窺える。その中、美しい海藻をあらわす「藻」（花藻・玉藻・白藻）は三良の歌において比較的独自のモチーフであると思われる。

本節では、前節に掲げた「花藻玉藻」及び「龍媛の賦」の双方に見られる「花藻玉藻」の表現に着目して考察していきたい。

まず「玉藻」とは、古代和歌において『万葉集』にもみられる歌語であり、とりわけ柿本人麻呂の次の長歌が有名である。

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時

の歌二首併せて短歌

石見の海 角の浦廻を…いさなとり 海辺をさして
にきたつ の 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻
朝はふる 風こそ寄せめ 夕はふる 波こそ来寄れ
波のむた か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を
露霜の 置きてし来れば…

〔万葉集〕巻2・131 柿本人麻呂

もとより和歌の神として仰がれる存在であるが、『万葉集』に石見相聞歌と呼ばれる長歌が載ることで、柿本人麻呂は一時期石見国に官人として赴任していたと考えられている。石見国府があった場所は不明であるものの、現在も石見地域では各地に人麻呂伝承地が残り、人麻呂さんと呼ばれ親しまれている。この長歌は、石見の妻との別れを「石見の海」から歌い起こし、その海波に揺れる「玉藻」を妻と一体化して歌うところに特徴がある。本歌群においても、「藻」は海の景物のみならず、「藻の花の華髪にしたるやさ乙女の」「潮浴みて藻の花かざす海姫」のように海の女神と一体的に歌われており、人麻呂歌と同様の発想に基づいている。

三良が人麻呂を詠んだ歌に、次の一首がある。

七つの灯火

人麿の杓のかほりをしぬびけり藻塩やく子と旅ゆく人
と（京奈良の旅に歌へる）増野翹白

〔銀鈴〕九号／明治三八年二月

『銀鈴』七号には紀行文「金銀花」が載り、三良が浜田から船旅で大坂に向かい、京都・奈良の名所めぐりが記される。「人麿の杓のかほりをしぬびけり」からは、この旅が、かつて人麻呂が石見での任期を終え、大和へ向かった旅路の追体験でもあったことが窺える。

さて、一方の「花藻」とは、夏に水面に花を咲かせる藻の種類であり、梅花藻などもその一つという。「玉藻」とは異なり、和歌においては一般的な歌語ではないものの、『銀鈴』には「花藻」を詠んだ歌が、三良の二例を含め全六例みられる。以下 a より f まで『銀鈴』掲載順にその用例を挙げる。

やさ笑

a 水垂るる花藻み髪にこころよき朝風たえず君をふくか
な 福田紫雲 (同三号)

夕ちどり

b 夕汐はひたよせ磯の岩かげに花藻ただよひ遠鳴く千鳥
福田紫雲 (同八号)

花藻玉藻

c ゆめなりや花藻玉藻がもつれたる潮に透き見ぬ龍女が
うなぢ 磯守の三良 (同十号)

みだればな

d 隠沼の花藻の中によき人のまろね姿よ春の月さす
森脇桃村 (同二二号)

龍媛の賦

e : 金龍に乗る奇し媛は、花藻玉藻を華鬢として しづ
しづまるる沖つ方。 : 増野三良 (同一四号)

ぬれ髪

f 濡髪や玉藻花藻の海底にうろくづめでたたすあえか
さ 福田紫雲 (同一六号)

「花藻」の語を三良以上に用いたのは、a b f の歌人・
福田紫雲である。b 「磯の岩かげに花藻ただよひ」と磯の
景物として詠まれるもの、a 「水垂るる花藻み髪に」、f
「濡髪や玉藻花藻の海底に」など、女性の女性の濡れ髪に
懸かるものとして詠まれている。

福田紫雲は『銀鈴』に先立つ『白檀弓』よりその作品が
みえる、新涼会の初期メンバーであった。次の「金銀花」
では三良が関西への旅において紫雲を訪れたことに触れら
れており、関西在住の会員と思われる⁽⁶⁾。

金銀花 増野翅白

(五) : 今夕福田紫雲兄をおとづれ候つつもり。 : 五
日頃汽車で後楽園も見てゆくつもりに候。——浪華に
て。(六) 小生京見物も終へ、本日帰浜致し候。三日
紫雲兄を訪ひ申し候て、色々ご高意にあづかり申候。
——浜田にて。(同七号)

三良の訪問に触れた紫雲の歌も、同号に掲載される。
増野翅白君と語る

みなさげや訪ひこし君に泣かれぬるうたなき友の才を
あはれぬ 紫雲 (同)

紫雲の歌からは、両者の交流が創作を通じたそれであつ
たことが窺える。三良は紫雲の作品に影響を受けており、
それが関西旅行における訪問に繋がったと考えられる。三
良の c e 「花藻」の語も、紫雲の a b 歌からの受容といえ
るだろう。

また、本歌群歌人の一員である森脇桃村も、d の自身の
作品において隠沼の風景の中に「花藻」の漂う歌を詠む。

これら三良・桃村の歌を承けてか、紫雲はさらに f の歌
で「玉藻花藻」を歌に詠む。加えて本歌群にみえる「うろ
くづ(鱗族)」（後藤孤星）の語も見える。a の主想である
女性の濡れ髪に、本歌群のモチーフを加え、海中の幻想的
な世界を詠むのである。このように、紫雲が詠んだ「花藻」
の語が三良・桃村に受容され、それをさらに紫雲が受ける
といった相互作用がみられる。『銀鈴』における歌人たち
の、互いの作品に影響を受けた意欲的な作歌活動を示すも
のといえるだろう。

三、女神の創造

「花藻」の場合とは反対に、三良の語を紫雲が受容した
例もみられる。

百重波(しのかめ会詩稿)

初秋や五挺櫓たてて黄金の海をあさりぬ龍女も来よと
福田紫雲 (『銀鈴』一六号)

初秋、五挺櫓の船で漁をする中、黄金の海に龍女の出現を期待し、現実世界に一瞬の幻想が抱かれる。この「龍女」とは、三良が自身の作品において繰り返し用いた語であった。「花藻玉藻」と「龍媛の賦」の創作の間に、三良は磯の乙女との付合による短詩「みつしほ」を発表している。

みつしほ 磯守の三郎 磯の乙女

潮鳴りや鷗舞ふみてみなぞこの(乙) 迷宮恋ひし貝に
ならばや(三)

魚ねむる玉藻のうへの春の月(三) 白鳥の背にうすあ
かりして(乙)

椿の戸ゆらぐ鬢香のよき君に(乙) まろうど来しと告
げぬうぐひす(三)

みつしほに二人がきよき恋凝りぬ(三) 真珠かがやく
花珊瑚かけ(乙)

八瀬の女も交りぬ花の大原や(乙) 比枝の法師も三五
の人も(三)

連歌すと今宵公達貝鞍の(三) 駒して来たり連翹の宿
(乙)

花笠や鳳凰縫ひし玉簾の(三) みくるまきしる西嵯峨
の里(乙)

えもわかぬ鳥の声しぬ木がくれに(三) 君と別るる夜
のさびしさよ(乙)

夜な夜なを龍女まありて灯すと(三) 翁かたりぬ島の
みやしろ(乙)

鳳凰の彩のしだり尾なよびかに(乙) 相思の人を巻き
にけるかな(三)

あけぼのや夢のなかなる人しひて(乙) 三瓶をめでぬ
ならびて欄に(三)

潮とよみ魔女が月よぶさびしみと(三) 闇はせまりぬ
頬をよせたまへ(乙)

(同一二四頁/明治三九年四月)

名義「磯守の三郎」と対を為す、「磯の乙女」とは誰だ
ろうか。十三号の三十六峰生は「小評」において「合作の
やうにしてあるが恐らく同一人作だらう、果して何人かは
知らないが」とするが、河野翠激「控へ帖(雑文)」には、
「吾なり乙女は本誌の某女詩人」としており明らかではな
いが(乙)、三良が「花藻玉藻」では桃村・掬雨・孤星との
連作、本作では磯の乙女との付合と、複数の詩人との合作
を積極的に試みていることは興味深い。複数の詩人らで幻
想的・浪漫的な世界を形づくろうとするのは「明星」的であ
るとされる(8)。

本作品は十二首構成で、①一〜四首目は神話における海
神の女と天孫との出逢いを想起させる男女の恋、②五〜八
首目は京の都の旅模様、③九〜十二首目は再び海の風景に
戻るも、①のような清廉さは消え、男女の逢瀬を描き耽美
的・唯美的傾向を深めている。

「龍女」(「龍媛」)は、「花藻玉藻」「龍媛の賦」「みつし
ほ」に共通して詠われる語であり、海の女神を指している。

ゆめなりや花藻玉藻がもつれたる潮に透き見ぬ龍女が
うなじ 磯守の三郎〔花藻玉藻〕再掲

〔花藻玉藻〕の揺らめく海流に、龍女のうなじが透き見
えたその一瞬は夢であつたのだからか。

「うなじ」とは、『みだれ髪』において詠まれた女性要素
の強い語である。

細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰
る夜の神 与謝野晶子

（『みだれ髪』「臘脂紫」明治三四年八月）
夜に来て朝帰る神、古代の三輪山神話を想起させる「夜
の神」に恋しい男を投影し、その御手で「細きわがうなじ」
を支えてほしいと歌う。

『銀鈴』では先の三良作のほか、桃村が次の歌を詠む。

火ぞ消ゆる油もて来よかくさけび日に夜に君がうなじ
まきぬ 森脇桃村 （同三三三号）〔夏木立〕

ここでは、燃え上がる激しい恋情の中、毎夜「君がうな
じ」を巻いて寝る我を歌う。いずれも共寝する女性の表現
である中、三良歌では、神話的風景における女神の官能美
が絵画的に表現されるといふ特徴をもつ。

本歌群の掉尾を飾る後藤孤星の歌も、同様の特徴を備え
ている。

〔潮浴みて藻の花かざす海姫〕と真珠とる子があらは
をほこる 後藤孤星（花藻玉藻）再掲

反復される藻の花の女神のモチーフに、真珠を取る海女

が重ねられ、その露わな裸体が歌われる。あたかも西洋の
神話画のような、豊満な肉体の官能美である。

女神は雑誌『明星』を象徴するモチーフであり、金星
Venusとして、その表紙が多く飾られた⁹⁾。島根県におけ
る明星系短歌会の二葉会を主宰する青戸白虹編の詞華集
『落穂集』（明治三六年三月）も、その表紙には百合を髪に
飾り竖琴をもつ女神が、星を背景に描かれる。木股知史氏
によれば、百合も『明星』によく描かれ、清浄のシンボル
としての百合は、時代が下るにつれて官能の暗示ともなっ
たという¹⁰⁾。

ウエヌス (Venus) は、ローマの植物の生育、菜園を司
る地母神であるが、ギリシャのアプロディテと同一視され
る。そのため、その神格は豊饒多産、愛・美と複合的であ
る。冥府の女王であり、植物の生育をも司るペルセポネと、
死と再生を司る美少年アドニスを争った神話は、このよう
なウエヌスの元来の性格によるものだろう。

『銀鈴』においてウエヌスを歌つたものに、井川恭（天
涯の孤客）名義）の次の歌がある。

香草

花被ぎ野に金星をふしめ見て夢とも座せり春の花王^{はなびらぎ}

天涯の孤客

（同三三三号）

美と豊饒の女神ウエヌスは「春の花王」として歌われる。
この野の「花冠」に対応すべく、三良は「花藻」を海辺の
女神を彩るモチーフとして用いたのではないか。本歌群の

副題「日本の女王」とは、山陰の地に住む三良が、自らの風土に海の女神の創造を意図したものであったのではないだろうか。

さて、「花藻」よりも一般的な言い方に、「藻の花」がある。本歌群においても三良、孤星が用い、他にはg千代延松灣、h桃村が用いる。

波

g 藻の花のかをりただよふ磯の朝沖の白帆は靄のなかなか
り 千代延松灣 (同八号)

そよ風

h 初夏や藻の花かほる水棲に青簾して風めでたまへ

森脇桃村

(同十四号)

浜田支部の会員である千代延松灣(尚寿)は、三良在学中の旧制浜田中学の教諭(明治一六年六月―昭和二六年一月二月在職)である。『銀鈴』の編集委員の一人(第八号に「入社」の辞あり)で、一二号より千代延春圃と改号している。次の美文や歌にも「藻の花」の語がみられる。

藻塩草 千代延松灣

つぎよがらす 月夜鴉と留めては見た―が―嘘のつけない―鐘の数う―

のんびりとした浮きたつ様な、欸乃が夕暮れの寂寞を破つて銀鈴をも振るかの様(中略)

蟹が家には灯火の一つ二つ見えて、藻の花の香夕の天地に満ち漂ひて、詩想転た禁ぜず、自然美の崇高偉大

を感じしむる折から

わしが心と舟乗業―は―人の知らない―苦勞する―沈痛な、一種いふ可からざる悲哀を帯びた声が、湿っぽい空気に誘われて冷やりとしたので、自分は愕然として身震いした。(後略) (同第八号)

波

島の寺鐘の響きの末消えて船はあしまの靄にくれゆく藻の花のかをりただよふ磯の朝沖の白帆は靄のなかなか
り (同)

やはり浜田の漁港だろうか、磯の香は「藻の花の香り」と表現される。幻想的な文脈で用いられることの多い「花藻」に対し、「藻の花」は実景的な表現である。

このように、「花藻」「藻の花」の表現は、『明星』時代において、浜田の海を彩るモチーフとして選ばれたものと考えられる。これら『銀鈴』浜田支部会員については、三良が次のように記している。

浜田支部通信(二月三日)

浜田支部は去る一月を以て創立せられ、会員との数未だ多からざれ共、各自最も熱心と真面目を以て創作に従事しつゝあり。第一例会も来ん紀元の佳節に於て開かんとし、漸次基礎の確定を期せり。今こゝに報導すべく多くの記事を有せざれ共、近き将来に於て一大飛躍を試むべく努めつゝあり。(翹白、記) (同四号)

会員は少ないものの、熱心な活動をみせる浜田支部は、

『銀鈴』の主力となっていたであろう。また会員は、旧制浜田中学の同窓生及び教諭が中心となつて構成されており、その結束力が窺える。

特に三良との関係が深かつたのは、共に浜田支部幹部を務めた桃村であつたと思われ、『銀鈴』九号から三五号までに作品が継続的にみられる。初期の作品には「罔象」『箜篌』「藻の花／花藻」など、三良とのモチーフの共有が多くみられる。また、共に編輯主任として浜田支部の会誌『春潮』（未見）を刊行した。後藤孤星^①は、この『春潮』の絵画を担当したとある（『銀鈴』第一三三号一四頁）。

孤星・三良共に絵を得意として『銀鈴』の挿画をも担当したことを思えば、浜田支部会員は画文に堪能な人材を揃えていたといえよう。のちに多摩帝国美術学校の教授となる杉浦非水が、明治三七―八年に同中学に美術教諭として赴任していたことも、三良らに大きく影響を与えたと考えられる。

いずれも『明星』に共鳴する彼らは、自らが生きる日本海沿岸部の地を神秘的・浪漫的に彩り、旺盛な創作活動を行った。本歌群は、「日本の女王」として新たな女神を創造しようとした連作の試みであつたといえる。

四、井川恭との関係

従兄弟・井川恭もまた、三良の創作に大きな影響を与え

た人物であつた。「花藻玉藻」「みつしほ」「龍媛の賦」の創作には、恭の作品とも深く関わつていると考えられる。

おさないころから僕は生意気に歌や新体詩のようなものを作つてたのしんでいた。感受性の鋭敏な彼は、僕がそんなことをやるのを見て、負けぬ気になつておなじようなことに興味をもちはじめた。

（恒藤恭「増野三良をおもふ」）

「花藻玉藻」が明治三十九年一月に発表された二ヶ月後、『ハガキ文学』には恭の次の詩作品が当該欄に最優秀（「天」として兒玉花外に選ばれ、掲載される）。

「天秘」 出雲 井川松琴

常夏の光明^{ひかり}ぞ背負ふ穹蒼の神、爛壞^{えん}の雲の冠りして、
天つ御階に臨御^{いで}し立てば、瑠璃琅の瓔珞^{えいらく}に、紫金^{しこん}のあやぶみゆらめきて 天蓋の真向^{まへむかひ}に朱の日は匂ふ。

晶^{あき}つなす八重の潮路の青渦^{あざむら}に、おどろ高鳴るわたの原、
萬有^{ばんいう}の恋のほむら燃やすと、茜^{あざみ}さす日の血たぎつ、雄波雌波^{おしなみ}たゝなかに、花摺^{はなまじり}裳被^{もろこ}きて立たす海女王。

空海を恋ふると言ふか海空を、慕ふと云ふか知らずあゝ、ほの紫の天つ御空に、濃藍^{のうらんせう}青の海原と、觸るる唇くちびると、唯尊^{ただたか}たゝかしこしと見るの恋路か。

（『ハガキ文学』第三卷第八号／明治三十九年三月）

三段落から構成され、第一段落は太陽神としての天つ神、第二段落は海原の女神、第三段落では天と海が互いに恋い慕うという壮大な内容である。このうち、第二段落にみら

れる「花摺裳被きて立たす海女王」には、本歌群の直接的な影響がみとめられる。

その後四ヶ月後に発表された三良「龍媛の賦」(第一節)は、この「天秘」の構想ときわめて似ており、さらに「天つ日の神」「穹門の城」「紫金」「神祕」などの語の受容がみられる。明治三十九年の一月から七月という短い期間に、両者は『銀鈴』『ハガキ文学』に競うように作品を投稿し、共に海の女神を主題とする作品を切磋琢磨し創作したのである。

【表】増野三良と井川恭の作品関係

発表年月	作者筆名	作品	掲載誌
明治三十九年一月	磯守の三郎	花藻玉藻	銀鈴
同 三月	井川松琴	天秘	ハガキ文学
同 四月	磯守の三郎・磯の乙女	みつしほ	銀鈴
同 七月	増野三良	龍媛の賦	銀鈴

恭は、三良の追悼文において「彼の歌や詩の題材には、わだつみの宮をかざる藻の花の奇しいかたちだの、深い水底に笠篋をかなでる水媛たちのうたのふしぎさだのがくり返しえらばれた」と評したが、それは恭の作品にも少なからず見られたモチーフであった。次に挙げるのは、これらから七年後、『松陽新報』に発表された二五歳の恭の随筆である。

松江美論その十二 松江小興

夏のたそがれ、碧瑪瑙いろの眸をしたうつくしい湖の水媛が、夕映にほふくれなるの空をうつゝなくあふぎ見ながら白魚のやうなほそ指をはしらせて藻の花の蔓を張つた貝ずりの竖琴をかき鳴らしつゝ、歌ふ。

すると水の底の眞砂のなかに半ば潜つた濃むらさきの蜩が、かあいゝ貝の唇をそつと開けて忍びきいた。みづわが歌ひやめると蜩も貝のくちを閉ぢたが、それ限りいつまで経つてもあけなく成つた……やさしい歌のこゑの思ひ出を小さい胸にひしと抱いたまゝ。

(井川恭「松江美論その十二」松江小興¹²⁾ 大正二(一九一三)年)

舞台は「碧雲湖¹³⁾」とも称された松江の宍道湖である。自身の故郷松江の美しさを幻想的に描くため、三良のよく用いたモチーフをここで意識的に用いる。

これらふたりの作品の根底には、三良が「あゝ、自然を愛し、自然を讀へてうたはんかな」とした、故郷の自然への礼賛があつただろう。恭の追悼文には、幼い頃より親密な交流を重ねたことが記される。

翌年の夏休みには、僕の方から濱田へ行つた、二人は睦じく海にあそび山にのぼつて楽しい夏を送つた。彼は泳ぎがうまくて、あざやかに抜き手を切つては、沖におよぎ出た。僕はよく巖石にこしかけて、それをながめていることがあつた。いまでもそのころの元気な

勇しい彼の姿が、記憶のなかの碧波のあいだに見えかくれて浮かんで来る。また二人は暑い土用の盛りにもめげずに、てくてくあるいて津和野に行き、青野山にのぼったりした。その後また彼は松江に來たし、僕も濱田に行った。こうして、少年のころの屈託のない時代に、二人は年々の夏休みを山に、海に、湖水にあそびくらしした。自然はそのいつくしみのふところに二人をいだき、ふたつの稚い胸に詩にあこがれる心を吹きこんだ。

(恒藤恭「増野三良をおもふ」)
浜田の海、松江の湖水に共に遊び、培われた自然への思いは、『明星』の浪漫的詩風と結びついて、自然の世界に遊ぶ神々の幻想的な作品を生み出したといえる。

おわりに

三良は、当時の象徴主義に多大な影響を受け、神秘的・象徴的な作品を創作した。しかしそれは先行の模倣に徹するのではなく、彼の「搖籃」の地、浜田の風景にそれを重ねることで、作品に独自性を加えたと考えられる。

しかし、それは三良一人によるものではない。旧制浜田中学の生徒・教諭を中心とした、熱心な「銀鈴」浜田支部メンバーの存在は大きく、その結実が本歌群や「みつしほ」などの連作であったといえる。また、福田紫雲といった松江支部会員や、同会員であり従兄弟でもある井川恭の存在

も重要であった。創作活動において、そうした会員同士の詩性を刺激した場としての『銀鈴』の意義は大きかったといえるだろう。

注1 『銀鈴』の概要については、拙稿「資料紹介」雑誌『銀鈴』と杉浦非水書簡』『島根国語国文』第十四号 二〇二二年九月を参照。また、島根県立

大学松江キャンパス図書館のデータベースに全号の画像が公開されている。

注2 恒藤恭「増野三良をおもふ」『松陽新報』大正五年六月

注3 岩町功「夭折の詩人「増野三良」小伝(上)」『郷土石見』八四号 二〇一〇年八月、「夭折の詩人「増野三良」小伝(中)」『郷土石見』八五号 二〇一〇年一二月、「夭折の詩人「増野三良」小伝(下)」『郷土石見』八六号 二〇一二年四月

注4 佐野晴夫「生田春月と山陰の詩壇(1)」(含増野三良著作年表)『山口大学教養部紀要 人文科学篇』一八号 一九八四年、佐野晴夫「生田春月と山陰の詩壇(2)」(含増野三良・井川(恒藤)恭著作年表)『山口大学教養部紀要 人文科学篇』一九号 一九八五年

注5 増野の京奈良への旅日記で、浜田↓大坂↓京↓奈

良↓浪華↓浜田の行程を辿る。これを素材にした

短歌が「七つの灯」(『銀鈴』第九号一八頁)

注 6

『銀鈴』第六号一六頁「松葉牡丹(消息)」に、「天気晴朗ならば明日曜、友と金剛山に登って、大に詩囊を肥やす筈が……」とあり、大阪・奈良在住の会員と思われる。また、十六号に「百重波」

(しのめ会詩稿)として、小村香雨、三島溪雲、梅原梅窓と共に短歌を寄せている。

注 7

『磯の乙女』名義の作品は、『銀鈴』一八号一四頁「十五夜」詩にもみられる。

注 8

松澤俊二氏よりご指摘をいただいた。

注 9

木股知史『画文共鳴』第二章 表紙の女神たち」岩波書店 二〇〇八年

注 10

木股知史(前掲書)

注 11

三良は後藤に対し「君繪の才あり」(『銀鈴』第九号一六頁)と評する。後藤孤星の名で『銀鈴』六号より作品が見え、十八号より後藤藤朗に改号。二八号まで作品がみられる。東京美術学校に入る(『銀鈴』第三二号十頁「誌友消息」)

注 12

井川恭『袖珍翡翠記』山陰中央新報社 二〇〇四年(初出 松陽新報一九一三年)

注 13

「碧雲湖」は近世末期に菅茶山が用いた宍道湖の雅称。

附記

本稿は、二〇二三年八月八日山陰明星歌人研究会(於島根県立大学松江キャンパス)での報告内容に基づくものです。発表に際してご指摘いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

本稿はJSPS 科研費(基盤研究C)「近代島根歌壇の研究―恒藤恭の短歌関連資料と山陰『明星』歌人資料を活用して―」研究課題/領域番号22K00324(研究代表者:奥野久美子)による研究成果の一部です。

(島根県立大学人間文化学部 准教授)